

第3回「育て！プリントコミュニケーション」コンクール 入賞作品から ———●よりよい通信をつくるヒント②

囲み記事の工夫と効用

入賞作品の多くに、楽しい囲み記事が設けられていました。一回限りのものもあれば、シリーズでひとつのテーマを追うものもありました。いずれも今号の「巻頭インタビュー」で藤沢晃治先生が「読ませる工夫」として強調している、「記事の区画分け」に成功しており、通信づくりの手法からも参考になると思われます。審査員の先生方も注目した囲み記事にはどのようなものがあるか、見てみましょう。

教師の意見を発信する場

囲み記事を上手に使って、教師の意見などを伝えているケースは、『学校通信「せせらぎ通り」』（市川市立南行徳小学校・武藤和彦先生）や、『学級通信「成」』（岡崎市立梅園小学校・柵木弓先生）、『学級通信「こぼ」』（岡崎市立生平小学校・小林彰一先生）など、ほとんどの作品で見られました。

一方で、子どもたちの声を積極的に取り上げる作品も目立ちました。

子どもたちが全員登場

優秀賞受賞の『学級通信「富樫便」』（酒田市立第四中学校・富樫紀子先生）では、題字横にスペースをとり、生徒のコーナーとしています。

「漢字一字で表現する今年のテーマ」「クラスのいいところベスト3」「私の好み」「ちょっとした幸せを感じるとき」「○年後の自分」「こんな時春を感じる」の6つのテーマで、生徒が毎号登場。題字横という、いちばん目立つ場所を活用しており、「生徒のことがよく分かり、十分楽しめる企画」と審査員から高く評価されました。



市川市立南行徳小学校 『学校通信「せせらぎ通り」』

同様に3クラス104名の子どもたち全員が登場するシリーズものが特長となっているのは、『学年だより「飛翔」』（倉敷市立琴浦西小学校・大崎孝先生）です。

「6年生の仲間たち」「夏休みとっておきの話」「小学校の思い出を胸にジャンプ」といったテーマを展開。審査員は「子どもたち、保護者どちらからも心待ちにされたことだろう」と評していますが、こうしたシリーズものの一部を囲み記事とすることで、効果的な紙面構成となっています。

楽しいコーナーづくり

生徒が登場するコーナーを定番として設けているのは、ほかに、『学校だより「きらきら星2」』（砺波市立砺波南部小学校・中嶋秀明先生）。「当番の話」（発表や質疑などのやりとりの記録）「花さき山」（友だちのよいところを伝える）「今日の

PRESENT 文中で紹介した全作品をはじめ、入賞作品35点と活動報告、講評などを掲載した入賞作品集（A4判・88頁）をご希望の先生方にさしあげます。お申し込みは財団ホームページ（<http://www.risoef.or.jp>）から。

日記」（先生の寸評入り）などが審査員にも好評でした。

『学級通信「笑顔の為に」』（岡崎市立連尺小学校・水越健介先生）も、「明日に向かって」「自己紹介」「みんなのなぞなど」などの楽しいコーナーを、設けています。

すっきり感を出す手法

記事を線で囲む手法を上手に使ってすっきり感を出しているのは、二つの「保健だより」です。

最優秀賞受賞の『ほけんだより「ウンターネルダス」』（豊橋市立芦原小学校・鈴木玉代先生）では、グラフの説明や訴求ポイントを線で囲んで強調。分かりやすい紙面づくりに成功しており、審査員は全国で発行されている「保健だより」のモデルとなる存在と賞賛しています。

また、優良賞の『ほけんだより「げんきな子」』（北海道滝上町立滝上小学校・蛇名千雪先生）も、関心を持ってもらいたい記事を、上手に線で囲むことによって読みやすさ、分かりやすさを演出しています。

蛇名先生は、保健だよりが「ともすれば内容もマンネリ化しやすい、一方通行になりがち」と入賞作品集の受賞の言葉で述べていますが、それを打開したいという問題意識がこうした工夫に結びついたと言えます。

また、『図書室だより「親子読書のすすめ」』（東広島市立西志和小学校・福岡博子先生）や、『進路ニュース』（荒川区立諏訪台中学校・香山昌彦先生）なども、同様に囲み記事の手法をうまく使って、読みやすい紙面になっています。



砺波市立砺波南部小学校
『学校だより「きらきら星2」』

倉敷市立琴浦西小学校
『学年だより「飛翔」』



荒川区立諏訪台中学校
『進路ニュース』

北海道滝上町立滝上小学校
『ほけんだより「げんきな子」』

